

序 人文・社会科学の研究・教育法における映像の高度利用に関する研究

山 中 速 人

研究の趣旨と目的

新しいメディアの登場は、学術研究の理論と方法を刷新するだけでなく、それが跳ね返って教育コミュニケーションの理論や技術の刷新を招来する。新しい映像メディアの登場は、たんに教育手法を刷新するばかりでなく、人間の自然観や科学的認識のパラダイムをも大きく変える力をもっている。

しかし、従来、教育における映像メディアの利用に関する議論はとかく教育技術や教育工学的な文脈で語られ、その技術的側面に関心が寄せられることはあったが、その映像メディアが人文・社会科学の分野における研究／教育の発展にどのような質的な意義を加えたかについては忘れられてきた。

本研究は、これまで映像の利用に立ち後れていた人文・社会科学の分野を対象として、その多様な研究／教育の現場で、今日の新しい映像メディアがもたらす研究・教育の利用の新しい可能性をあきらかにすると同時に、斬新な映像の利用によって従来にない新たな研究／教育の発展を大学教育の現場をフィールドとして具体的な実験的試みを行なうことによって切り開くものである。

研究の内容と方法

大学をフィールドとして、映像メディアを活用した新しい研究／教育の試みに関する実践的研究を行なう。

- ①理論的研究：人文・社会科学の諸分野において映像がそれぞれの方法論の中で、どのように位置づけられているのか、また、位置づけられ得るのかについて、理論的な展望をあきらかにする。
- ②フィールド研究：実際に、大学で行なわれている研究／教育に映像メディアを活用した研究／教育法の事例（とくに人文・社会科学分野）を収集し、その調査と内容分析を行ない、その実態を明らかにする。
- ③試行研究：今日の映像メディアを活用していかなる新しい研究／教育が展開できるか、人文、社会、言語等の各領域で活躍中の中堅研究者・大学人に対して斬新な構想や提案の提出をうながし、その提案にもとづいて質の高い研究法や教材を実際に共同開発し、その評価を行なう。
- ④試作教材の公開：試作された映像教材等の中から優れたものを選んで、ビデオテープ、レーザーディスクやCD-ROM等を制作し、大学教材として一般に公開、提供する。また、そのような新しい映像教材と共存する従来型のテキストの開発研究を行なう。

このような研究意図の下に1992年度の研究課題として実施された研究プロジェクトのひとつが、本書で報告する模擬的家族活動測定法の映像マニュアルの試作研究であった。本研究報告の執筆は、同プロジェクトを実際に担当し、映像マニュアルの開発を行なった関西学院大学助教授、立木茂雄氏を中心とする研究グループが担当した。また、同映像マニュアルの収録と制作は、映像出版研究会プロデューサ、徳永利光氏が担当した。立木氏の優れた着想と、それを現実に映像化するための徳永氏の優れた技術と経験がなかったら、本研究は成功を見ることはなかっただろう。この場を借りて両氏の献身に心から感謝の意を表するものである。

また、これ以外にも、放送教育開発センターでは、今後とも人文・社会科学領域での映像利用の先駆的な試みを続けていく所存である。一層のご支援を乞うものである。

なお、私事に関することではあるが、本プロジェクトの研究代表である山中速人は、平成5年度末をもって、本センターを離職し、大学へ転出した。本研究プロジェクトは、平成6年度からは、マルチメディア化が進行する今日の映像メディア環境を射程にいれて、当センターの濱野保樹助教授を主査として、より包括的な課題を掲げ、より意欲的な発展を企図するところとなった。これまで以上に、本研究プロジェクトが、より実りある一層の成果をあげることを願ってやまない。